中国における日本古代史研究の現状と課題

王　海燕

中国の日本史研究において、古代史とは従来から古代と近現代の二区分法によって、広く原始から江戸時代までを含める歴史、すなわち前近代史を指すものとして定義される傾向が根強かったが[1]、最近では、日本の時代区分の影響を受け、原始から平安時代にかけての歴史として限定されることもある。本稿では、筆者自身の研究分野に基づいて、古代を3世紀から11世紀後半までの時代としたい。

現在の中国では、日本の歴史や文化に興味を持つ人が、とりわけ若者に増えつつあるが、近現代史の研究に比べると、日本古代史は研究者の人数も活躍も低空飛行となっていると言える[2]。しかしながら、少人数でも研究が進んでいる。本稿では、中国の日本古代史研究の現状と課題について述べてみたい[3]。

1　例えば、2006年12月から2009年12月にかけての日中共同歴史研究は前近代と近現代という二つの時期に分けて行われていたが、2014年に中国で出版された『中日共同歴史研究報告』は、中国の学界の習慣的な観念に関する編集者の考慮によって、「古代史巻」と「近代史巻」という2冊に分けられた（歩平・北岡伸一編『中日共同歴史研究報告』社会科学文献出版社、2014年）。

2　注1に述べた日中共同歴史研究を例としてあげると、2006年12月に両国の研究者（各々10名）で構成された共同委員会には古代・中近世と近現代という二つの分科会が設けられたが、その中で、古代・中近世分科会における中国側のメンバーは4人しかおらず、かつ全員が近現代史の研究者である。その後、共同研究者として外部執筆者11名が加えられたが、前近代史の分野の研究者は二人しか招かれなかったのが現実である。この状況は、共同委員会メンバーが双方の各政府に選ばれたという事情に理由があるのみならず、中国における日本古代史研究の不振をも裏付けるであろう。

3　最近、中国の研究者の著わした日本語の日本古代史論文は日本で刊行されたことも少なくないが、言語によって研究の手法などがある程度異なるので、ここでは中国で発表された中国語の日本古代史の研究成果のみを基に述べることにしたい。また、台湾と香港の研究者の研究成果について、筆者の参照できる資料は限られるので、敢えて触れない。

1. 1980年代の日本古代史研究

1980年代は中国の日本古代史研究がもっとも勃勃たる時期であった。この時期の成果に関しては多く紹介されているため、ここでは簡略に触れよう[4]。

周知のように、中国史学界においては、長い間にわたって、マルクス主義歴史学が主流を占めており、生産力と生産関係との関係や階級間の関係を軸として国家の形成や社会制度の変化を解釈する研究が中心であった。その結果、1980年代、日本古代史研究者は主に、日本列島の国家形成および3世紀から7世紀までの社会の性格に注目し、邪馬台国、部民制、大化改新、班田制などのテーマを中心に、日本列島の国家起源や奴隷制・農奴制・封建制の時代区分をめぐって、論著や研究会を通じて学術的な議論を行い、数々の研究成果を上げた[5]。

中国の日本史研究者のほとんどは大学系と社会科学院系という二つの組織のいずれかに所属している。1980年代には、関連史料の所蔵地の関係で、日本史研究も日本古代史研究も、その研究拠点は、ほぼ北京・天津・瀋陽・長春にある社会科学院や大学に置かれていたため、研究者の分布も北京・天津・東北地方に集中した。例えば1988年から1990年にかけて、中国の研究者たちが著して日本で出版された『東アジアのなかの日本歴史』シリーズ（六興出版社）は、執筆者15名が全員北京・天津・東北地方の研究者であった。ちなみに、このシリーズ全13巻の中に古代史は2巻（沈仁安『倭国と東アジア』、王金林『奈良文化と唐文化』）ある。執筆者二人は当時の中国における日本古代史の中堅研究者であり、この二人が執筆したことは当時の日本古代史研究の活況を反映したものと言えるが、その書名からは、古代日中関係や日中文化交流も中国の日本古代

4　1980年代の中国の日本古代史研究に関して、日本語の紹介や評論には、武光誠「中国人の日本古代史研究の歩み」『明治学院論叢』375号、1985年3月、徐建新「1978年以来の中国における日本古代史研究の成果と課題」鈴木靖民訳『国学院雑誌』89-6、1988年6月、李卓「近年中国学者の日本古代史研究」『史苑』50-2、1990年5月など、中国語で論及されたものには、李玉ほか編『中国的日本史研究』世界知識出版社、2000年、徐建新「30年来的中国日本古代中世紀史研究」『日本学刊』2011年第3期、王金林「六十年来中国日本史研究的回顧」李卓編『南開日本研究2013』世界知識出版社、2013年などがある。

5　例を挙げると、汪向栄『邪馬台国』中国社会科学出版社、1982年、王金林『簡明日本古代史』天津人民出版社、1984年、禹碩基『日本大化革新』商務印書館、1985年などがある。

史研究者に注目されていたことが窺われる[6]。

この時期の古代日中交流に関する研究は主に鑑真と遣唐使という二大テーマを軸に展開した。その中には、唐文化に対する日本の受容の姿勢を強調しながら、鑑真、阿倍仲麻呂、吉備真備、藤原清河、最澄、空海、円仁などの人物像を描出したものも少なくない[7]。

2. 1990年代以来の日本古代史研究の特徴

1990年代以後、中国の日本史研究は新しい段階に入り、日中学術交流の繁栄とともに、日本学界の研究視点や研究方法の影響を徐々に受けるようになった。これによって古代史研究のテーマは、国家形成、身分制、律令制、天皇制から都城制、儀礼、婚姻、信仰、技能、人と物の移動などさまざまな分野に及んだ。多くの研究成果が刊行されているが、その特徴は大きく下記のようにまとめることができる。

第一に、日中関係史または日中文化交流史の研究が多いこと。

古代の日中関係史は、従来から日本史研究の中でも重点が置かれ、邪馬台国・曹魏関係や遣隋使の国書問題や日唐関係などは、日本史研究者のみならず、中国史研究者にも関心が高い。1990年代に入ると、単なる日中関係の論述に限らず、朝鮮半島の情勢をも考慮しつつ、東アジアの視点で古代日本の内政や国際的環境との連動性なども視野に入れながら、遣唐使の派遣や白村江の戦いや日宋関係などが検討されている[8]。

渤海国史研究においても、日本と渤海国の関係が唐日・唐渤関係の延長線として、特に中国の東北地方の研究者に注目され、日渤両国それぞれの外交的思

6　『東アジアのなかの日本歴史』シリーズは日本語版だけで、中国語訳版はない。

7　夏応元「対清代以前中日関係的研究」李玉ほか編『中国的中日関係史研究』世界知識出版社、2000年参照。

8　夏応元「遣唐使初期倭国的対外政策」王金林・湯重南編『走向国際化的日本——国際学術研討会論文集』天津人民出版社、1995年、沈仁安「唐日関係的若干問題」前掲『走向国際化的日本——国際学術研討会論文集』、韓昇「白江之戦前唐朝与新羅、日本関係的演変」『中国史研究』2005年1期、劉恒武「五代時期呉越国與日本之間的「信函外交」」『社会科学戦線』2009年第1期、王小甫「七世紀東亜国際秩序的創立」前掲『中日共同歴史研究報告』古代史巻、馬雲超「高麗文宗「請医事件」與宋日関係——11世紀後期日本外交的一個側面」『世界歴史』2017年第1期など参照。

惑や経済的・文化的交流などについての研究が進んでいる[9]。

また、1980年代から、中国の日本古代史の研究者も高句麗好太王碑（広開土王碑）に目を付け、4世紀末から5世紀初の倭国と朝鮮半島の関係を分析した[10]。とりわけ好太王碑の拓本に関する徐建新氏の研究は特筆に値する[11]。

1990年代以降、日中文化交流史の研究は著しく発展してきた。1996年、周一良・中西進編『中日文化交流史大系』シリーズ（全10巻、中西進・周一良編『日中文化交流史叢書』の中国語訳）が中国で出版されて以来、思想文化交流、人物往来、中日の習俗比較などの側面から、各時代の中日交流史の研究が進んでいる。古代史の分野では、日本文化の独自性を論じた研究もあるが、古代の日本文化における中国文化の影響及びその変容を論じる傾向が強いと言える[12]。

なお、2004年に日本の遣唐留学生あるいは官吏だった井真成の墓誌が発見され、中国の学界においてもこれに関連する研究が一時的に盛んになった。しかし、唐代史の研究者に比べると、日本古代史の研究者による研究成果は少ない

9　馬一虹「浅論渤日邦交的歴史条件」『日本研究』1993年第4期、孟東風「古代渤海與日本的文化交流」『吉林師範学院（哲学社会科学版）』1994年第4期、任鴻章・馬一虹「渤日関係論――「属国」？「与国」？」『日本研究』1995年第2期、魏国忠「論渤日関係中的対等外交」『日本研究』1996年第1期、王承礼・王巍「従朝貢外交看渤海和日本的関係――以国書体例和聘使往還年限之争為中心」『北方文物』1996年第4期、田玉娥・劉舜強「従「和同開珎」銭談渤海国与日本的経済往来」『中原文物』2012年第1期など参照。

10　沈仁安「倭国の発展」『倭国と東アジア』六興出版、1990年。

11　王培真・徐建新「好太王碑原石拓本的新発現及其研究」『世界歴史』1993年第2期、徐建新「関於北京大学図書館所蔵好太王碑原石拓本」『世界歴史』1995年第2期、同「高句麗好太王碑早期墨本的新発現――対1884年潘祖蔭蔵本的初歩調査」『中国史研究』2005年第1期、同「高句麗好太王碑拓本的分期與編年方法」『古代文明』2009年第1期などを参照されたい。

12　例として挙げれば、呉廷璆・鄭彭年「隋唐時代日本與中国文化」『世界歴史』、1992年第6期、王金林『漢唐文化與古代日本文化』天津人民出版社、1996年、劉曉峰「日本冬至考――兼論中国古代天命思想対日本的影響」『清華大学学報（哲学社会科学版）』2007年第3期、王海燕「古代日本五月五日礼儀中的中国因素」『古代文明』2008年第1期、閻華芳「日本平安前期釈奠対唐礼的継承和本土化」『古代文明』2018年第4期などがある。

のである[13]。

第二に、個別具体的なテーマより通史的研究が重視されていること。

前述したように、現在にいたるまで中国の研究者は多様な側面から日本古代史の研究を行っているが、中国における日本史は世界史の一分野として設けられており、従来から国内に向けて日本の歴史を紹介するという役割が与えられるため、古代史のみならず、日本史研究全般も日本のように個別具体的なテーマに関する実証研究は多くないと言わざるを得ない[14]。

1994 年に出版された呉廷璆編『日本史』（南開大学出版社）は中華人民共和国成立以来、原始時代から現代までの日本列島を語っている最初の通史で、南開大学と遼寧大学の研究者を執筆者として、1982 年から 1993 年までの 11 年にわたって完成されたものである。3 巻 36 章の構成の中で古代は 5 章あり、マルクス主義的史観における原始社会から奴隷社会・封建社会への変化を軸に、古代日本の展開を説明している。

その後しばらく、通史の形での出版はほとんどなかった。2000 年代に入ると、中国の研究者の著わした日本の通史は何部か刊行されたが[15]、近現代史の著者が多いので、古代に関しては漠然たる解釈が少なくないと言える。しかしながら、古代史の研究者が著わした時代史も出版され、東アジアおよび王権や都城などの視点から、上古ないし古代の歴史の展開が語られている[16]。

さらに、通史的なプロジェクトは国家によって推進されており、国家重大プ

13　賈麦明「新発見的唐日本人井真成墓誌及初歩研究」『西北大学学報（哲学社会科学版）』2004 年第 6 期、栄新江「従「井真成墓誌」看唐朝対日本遣唐使的礼遇」『西北大学学報（哲学社会科学版）』2005 年第 4 期、王子今「井真成墓誌文試補釈」『西北大学学報（哲学社会科学版）』2005 年第 4 期、王義康・管寧「唐代来華日本人井真成墓誌考辨」『中国歴史文物』2005 年第 5 期、馬一虹「日本遣唐使井真成入唐時間與在唐身份考」『世界歴史』2006 年第 1 期、韓昇「「井真成墓誌」所反映的唐朝制度」『復旦学報（社会科学版）』2009 年第 6 期などを参照されたい。

14　ただし、日本向けの論文の場合は、特定の史料の紹介や個別具体的な研究が比較的多いことも事実である。

15　王新生『日本簡史』北京大学出版社、2006 年（2013 年第 2 版、2016 年第 3 版）、同『日本史随筆』江蘇人民出版社、2011 年、王仲涛・湯重南『日本史』人民出版社、2008 年（2014 年修訂版）、馮瑋『日本通史』上海社会科学院出版社、2008 年（2012 年再刷）などがある。

16　沈仁安『日本起源考』崑崙出版社、2004 年、王海燕『日本古代史』崑崙出版社、2012 年。また、1980 年代に出版された王金林『簡明日本古代史』天津人民出版社、1984 年は時代史として有名な著作で、原始時代から江戸時代までの歴史を論述したものである。

ロジェクトとして2013年に「新編日本史」（担当機関：南開大学日本研究院）、2017年に『中日文化交流史叢書』（中日合作版。担当機関：鄭州大学）がそれぞれ国家社会科学基金に採択され、それらの構成には古代史も含まれた。また、江蘇人民出版社の企画で進んでいる『日本通史』（全6巻、未刊行）の中にも、原始巻と古代巻が設けられた。

第三に、実証的な研究が少ないこと。

前述した通史が重視されているという特徴とも関連しているが、実証的な研究は多くないと言える。近年、中国の日本史研究者のなかで、日本に留学した経験者が多くなり、日本の研究方法による実証的な研究は以前より増えてきている。一方で、特に日本の古代史について関心を持っている者が少ないことと、古代の全体像を把握しきれない者も多いことにも理由があるかもしれないが、ミクロ的視点のみの論文は中国の雑誌に掲載され難いのである。そのため、筆者を含めて日本から中国に帰国した研究者は、人によって程度は異なるが、国内の状況に合わせているのが事実である。ただし最近は、もっと基礎的・実証的な研究を行うべきという声も上げられている。

3. 日本古代史研究の展望

周知のように、中国には、国家社会科学基金（以下、社科基金と略称）があり、人文科学・社会科学の研究を助成している。日本の科学研究費助成事業に相当するものである。この基金に採択された日本古代史にかかわるプロジェクトは多くないが、今後の研究の動きが窺えるため、社科基金のデータベースに基づいて、中国の日本古代史の研究動向について述べてみたい。

まず、東アジアの視点が注目されている。社科基金に採択された研究課題のデータによれば、東アジアの視点は、世界史の分野では2008年から、中国史の分野では2012年から重視され、「東アジア」を冠したプロジェクトが徐々に増えつつある[17]。そのなかで、日本古代史にかかわるプロジェクトが2012年に2本立てられた[18]。

17　世界史の分野と中国史の分野と合わせて東アジアの視点からの社科基金の研究課題は2007年までに1本（1996年）しかなかった。しかし、2008年から2018年にかけて、世界史の分野に15本、中国史の分野に11本採択された。

18　「日本古代貨幣制度変遷と東亜貨幣文化圏的興衰研究」（周愛萍、2012年）、「中国古代時間体系対東亜地区的影響研究」（劉暁峰、2012年）。

次に、史料の編纂や研究において変化がみられる。現在まで、日本史の史料編纂はほとんど近代史・現代史の分野で行われていたが、2011年以来、歴史学の分野全体で文献史料の収集・整理と研究のような研究課題が多く採択されており、中国政府の方針が窺える。日本古代史の史料編纂に関するプロジェクトはまだ立てられていないが、「日韓朝三国出土漢文典籍簡牘整理研究」（葛継勇、2016年）という研究課題があることから、文献のみならず、木簡にも注目する流れが窺える[19]。

第三に、社会史や災害史など多様な視点からの研究が推進されている。前述したように、1980年代以前、中国の日本史研究はほぼマルクス主義的な歴史学の方法論で行われていたが、1990年代以後、アナール派歴史学などの流行思潮の影響を受け、新しい方法論で日本史を研究すべきという認識が徐々に現れている。その結果、社会史的視点からの研究プロジェクトとして「中日両国歴史都城遷徙与社会形態転変」（韓賓娜、2005年）や「中日古代社会結構比較研究」（李卓、2012年）が社科基金の助成を受けた。

また、東日本大震災が起きた2011年以降、古代の災害や環境が歴史の進展に如何なる影響を与えたのかが関心を集め、「日本古代災害社会史研究」（王海燕、2013年）が社科基金プロジェクトとなった。

以上に加えて、「中日関係史（894－1170）」（郝祥満、2012年、後期資助）、「日本遣唐使研究」（李広志、2017年）、「中日古代抜牙風俗比較研究」（何星亮、2017年、後期資助）、「古代中日仏教外交研究」（江静、2019年、重点）のような、日中関係・交流や文化人類学の立場から検討する研究課題も採択された[20]。

19　日本古代史の文献史料を中国の国内に紹介するという計画も進んでいる。王勇編『歴代正史日本伝考注』上海交通大学出版社、2016年、王金林編『日本歴史基本史料集』第1巻、人民出版社、2017年が次々と出版された。

20　社科基金プロジェクトに限らず、2000年以降の研究成果からみても、研究テーマが多様化していることが分かる。例えば、徐建新「古代日本律令制国家的身分等級制」『世界歴史』2001年第6期、王金林『日本人原始信仰』寧夏人民出版社、2005年、王海燕『古代日本的都城空間与礼儀』浙江大学出版社、2006年、劉琳琳「日本古代国家疫病祭祀中的鬼神観念」『世界歴史』2010年第2期、王玉玲「災異思想在日本律令時代的発展及影響」『日本問題研究』2014年第1期、郝祥満『奪然与宋初的中日仏教交流』商務印書館、2012年、葛継勇『七至八世紀赴日唐人研究』商務印書館、2015年、官文娜『日本家族結構研究』社会科学文献出版社、2017年などがある。

おわりに

以上、中国の日本古代史の現状について述べてきた。今後の課題は次の通りである。

まず、個人より研究チームとしての研究が重視されていることである。近年の中国では、国家社会科学基金の重大・重点プロジェクトの申請に際しては、個人より研究チームでの研究が重視されており、これにともなって、北京大学の江戸時代研究、南開大学の日本現代化研究、東北師範大学の近世東アジア思想史研究、浙江工商大学の文化交流史研究が顕著な成果をあげている。しかし一方で、研究チームの研究テーマに沿って論文・著作を執筆しなければならないので、研究者個人として自身の関心に従った研究をなかなか深められないという問題も存在する。

次に、研究テーマの多様化とともに、日本の古代史研究と対話できるようにするため、研究方法としては実証を行った上で、マクロ的視点をも用いて、日本の研究成果を把握しながら、異なる視点や側面から研究を行い、通史的な研究が多い現状を改善することである。

第三に、現在の古代史の研究者の研究分野からみれば、政治史、対外関係史、文化史の研究が多い一方で、財政史、経済史、地方史の研究は極めて稀である。さらに、摂関政治や院政に視線を向ける研究者も少ない。これらの分野についても研究者を育成していくことが必要であろう。

（おう かいえん　中国・浙江大学 教授）